

学術資産のデジタルデータ化—記録保存と活用の狭間で

黒崎浩行（実行委員）

はじめに

本事業（学術フロンティア「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」平成 11～18 年度）で行われてきた画像資料のデジタル化は、何を目標とし、どのような経過をたどって成果を生み、どのような課題を残したか。それについては、すでに事業報告書【國學院大學日本文化研究所 2004】に繰り返し記されており、また、作業実務を計画・実行してきた中村耕作氏をはじめとするスタッフが研究論文という形で公表している。本報告は基本的にそれらに依拠しながら成果と課題を再確認するものであり、特に目新しい内容ではないことをあらかじめお断りしておく。

画像資料デジタル化の俯瞰

本事業における画像資料デジタル化の作業プロセス全体を図 1 に示した¹。この図は、左上から右下へと時間的経過を表してもいる。これをもとに、一般論ではなく、本事業特有の課題と作業上のポイントが何であったかを整理・確認していく。

本事業の出発点は「大場磐雄博士写真資料」であった。博物館・美術館・公文書館などのデジタルアーカイブのように、今現在の収蔵物（現物、モノ）を整理・公開するのではなく、過去に行われた学術調査において蓄積された資料を整理・公開することが出発点になっている。

図 1 で右下から左上へ伸びている点線は、公開された情報を通じての私たちの関心を示している。活用までを視野に入れて整理を行うとき、私たちの関心はその画像に映っているモノ・風景・出来事に向いていることを前提にするのはごく自然であろう。本事業の初期段階において、「撮影対象」・「撮影対象の種類」という標目が設けられていた【國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 2000: 12】ことはそれを裏づけている。

だがこのような前提にもとづく作業は、慎重に軌道修正されることになった。それは、本事業が中心的に扱ってきたのが「学術調査写真」[中村 2005] であることに起因している。そこに映っているモノ・風景・出来事は、すでに資料化されていると言える。その状態を保存・復元し、メモ書きなどの精密な解読や追跡調査によって可読化（テキスト化）すると

¹ デジタル化の詳細な工程、原板の修復・転写等、保存用画像データ作成、冊子体目録への流れは省略している。詳しくは【國學院大學日本文化研究所 2004: 51】参照。

いう手続きが第一義的に必要である、という認識がもたされた。なぜ必要なのか。それは、資料の全体像を把握し、資料形成過程の学史的意義を確認することにつながるからである [同 24-25]。こうした認識にもとづき、個々の資料群に即してメモ書き等からテキスト化が可能な標目を設けることが第一段階の作業として確立した。

また、この関心の方向というポイントは、ガラス乾板のデジタル画像資料化にあたっても独自の方針を確立することにつながっている。それは、ネガ写真というものはプリント時・ポジ転換時の露出補正によって見えるものが違ってくるという性質に起因している [武田 2006]。画像に収められた情報をどれだけ引き出せるか、はデジタル化のプロセスに依存するところが少なからずあることになる。本事業では原板、フィルムネガへの転写、印画紙へのプリント、スキャナによるデジタルデータ作成という多種類の保管を行ってきた。その中ではデジタルデータが最も可搬性があり、最も広く利用されうるものだろうが、こうした問題を抱えていることを常に意識すべきだろう。また、同様の問題から近年 RAW データが注目されているように、多様な関心・ニーズに応えうるデジタルデータの保存形式という観点からも将来的には見直しが必要となってくるだろう。

デジタルデータのウェブ公開と活用

本事業における画像資料のウェブ公開は、平成 13 年 (2001) 6 月から開始した²。静的な HTML によりサムネイル画像を並べ、クリックすると中解像度の画像が表示されるシンプルなものだったが、Yahoo や Google などの外部のサーチエンジンを経由して検索することが可能であり、各機関からの利用の問い合わせや教育利用などが広がる結果になった。

本格的なウェブ公開は平成 16 年度 (2004) から、(株)東芝電力システム社の開発した画像データベースシステム「でんとうなび™」 [平山 2006] を利用して、「学術資料データベース」³として開始した。それまで蓄積したデータをすぐに公開でき、管理も容易であったことが主な利点だった [中村 2006: 14]。しかし、利用する側から見ると不便な点もさまざまに指摘されている。

かつての静的なウェブ公開に比べて不便になった点の一つに、外部のサーチエンジンから画像資料へと直接たどることができなくなったことがある。表 1 は、平成 18 年 3 月 26 日から平成 19 年 2 月 7 日までの約 1 年間のアクセスログをもとに、外部のサーチエンジンの検索結果から「学術資料データベース」にたどりついたさいの検索語句を、多かったものから 10 位まで列記したものである。収録されている個々の画像資料に関連する語句としてはかろうじて「土器」があるのみで、あとはデータベースの発信主体や資料形成主体を指し示す語句が並んでいることがわかる。今日のサーチエンジンに依存したウェブ空間のエコノミーからしても、また自由なハイパーリンクによって集合的知識の創発を促すというウェブの本来的な理想 [Berners-Lee 1999] からしても、不本意な状況にある。

ただしこうした問題は「でんとうなび™」の仕様にもみ帰せられることではなかった。そ

² <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>

³ <http://frontier-db.kokugakuin.ac.jp/>

の主因は、本事業が整理・公開する資料群を横断するような共通標目の検討や、他の学術資料との関連づけを可能にするようなプラットフォームの設計・構築が、ウェブ公開のスケジュールに遅れをとってしまったことにある。さらにこれと平行して、平成 14 年 (2002) 秋から始まった 21 世紀 COE プログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」の平成 19 年 (2007) 3 月をもっての終了と、平成 20 年 (2008) の学術メディアセンターの竣功に向けた機構改革の進行が重なり、学内学術資産全体を視野に入れた統合的な (メタ) データベースシステムの必要性が増しているものの、その構築に向けた実質的な動きがようやく始まろうという段階にある。

とはいえ、平成 18 年度には、資料群間を横断する共通標目の策定・入力と「でんとうなび™」への横断検索機能の追加、それに学内学術情報へのリンクの試行を進め、可能な限りで現状の改善を図った。こうした試みは、今後構築されるであろう統合データベースへのパイロット的な意味合いをもつ。

おわりに

本事業の最大の成果はやはり、劣化画像を含む学術調査資料を適切にデジタルデータ化するための方法論を確立したことと、それを経験的に体得したスタッフの育成にあったと思う。

だが、最終的には外部利用者の関心に応えてこそ、劣化画像は「救われた」と言えるだろう。その点ではまだ道半ばである。デジタルデータとウェブの利点を活かした使いやすく創発的なデータベースシステムの構築と、授業などでの特定テーマに即した有効な利用場面のデザインが今後の課題となろう。

参考文献

- Berners-Lee, Tim 1999 *Weaving the Web: The Original Design and Ultimate Destiny of the World Wide Web by Its Inventor*. Harper San Francisco. (邦訳 『Web の創成—World Wide Web はいかにして生まれどこに向かうのか』 高橋徹訳、毎日コミュニケーションズ、2001 年)
- 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 2000 『平成 11 年度 國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』國學院大學日本文化研究所。
- 國學院大學日本文化研究所 2004 『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』平成 11 年度～平成 15 年度私立大学学術研究高度化推進事業(「学術フロンティア推進事業」)研究成果報告書。
- 武田芳雅 2006 「写真の保存と資料化—ガラスネガの資料化に際しての問題点—」『國學院大學学術フロンティア事業 研究報告 人文科学と画像資料研究』3: 33-40。
- 中村耕作 2005 「学術調査写真の整理・公開の現状と課題—大場磐雄博士写真資料整理をふまえて—」『國學院大學学術フロンティア事業 研究報告 人文科学と画像資料研究』2: 17-28。
- 2006 「写真資料の整理とデータベース化の課題」『國學院大學学術フロンティア事業 研究報告 人文科学と画像資料研究』3: 11-18。
- 平山廣和 2006 「「でんとうなび™」の学術資料公開への活用」『國學院大學学術フロンティア事業 研究報告 人文科学と画像資料研究』3: 19-23。

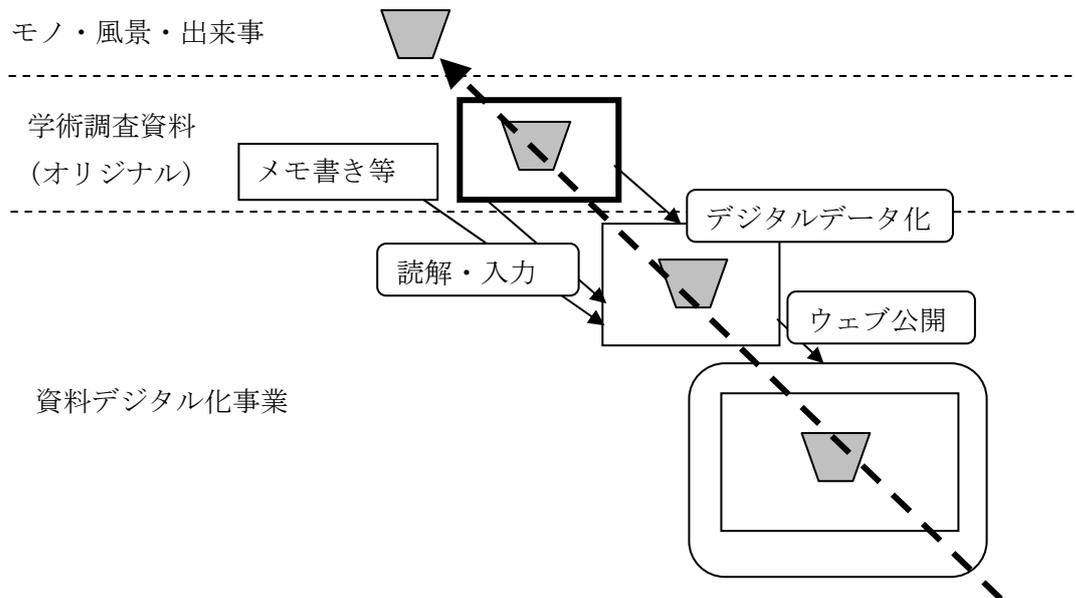


図 1 画像資料デジタル化・公開の作業プロセスの流れ

検索語句	件数
考古学者	83
國學院大學	35
柴田常恵	30
皇學館 國學院	26
博士+写真	26
大場磐雄	17
土器 データベース	17
國學院	12
考古学者について	11

表 1 サーチエンジン検索語句上位 10 (2006 年 3 月 26 日～2007 年 2 月 7 日)